

新任の挨拶：センターの夢と現実（うつつ）

先端基礎研究センター 岡田 漱平

1. まずは自己紹介

前任の棚瀬さんのあとを受け、先端基礎研究センター（以下、センター）次長として、JCOの事故の真っ直中に赴任して参りました岡田です。戦後間もない昭和22年生まれの子のしし年、血液B型。がむしゃらに突っ込んでいき玉砕しそうになるのを天秤座生まれの性格がかろうじて抑えています。

2. できることとできないこと

センターに引っ越してきて2カ月が経ちました。なにしろ研究テーマがDNAから中性子星まで幅広く分布しているので、じっくり勉強していたのでは追いつきません。なにか問題が出てくるたびに、OJT (On Job Training) しています。

このところ、ぼんやりとですが見えてきたことがあります。センターの次長の役割は、まず、センター長の人柄と考え方に惚れ込むことでしょう。これは、もうできました。次に、そのセンター長の理想を実現するため、理想と現実との狭間で現実側と折り合いをはかることでしょう。「実現」と「現実」は漢字の順番が入れ替わっただけなのに、ときには最も遠い意味になることがあるので、簡単ではありませんが、やらなくてはいけない努力目標です。前センター長の伊達先生が、先端基礎研究交流棟完成記念特別講演会で次のように述べられています。「(センターの基礎研究)推進室は理事会にはルール通りにやっていますと言わなきゃならない、しかし一方、センター長にはルールにとらわれずにやっていると言わないといけない(笑)」。これは実に含蓄のあるお言葉で、一面的に見ることはできませんが、敢えて額面通りに受け取るならば、そんな幕府から尾張徳川家に送り込まれた目付家老のような技量は、私にはありません。しかし、悩んでいても仕方がないので、いろいろな方々のお知恵をお借りして、やって行こうと思っています。

私は、個人的には、原研の研究のコアは原子炉だと考えています。原子炉の研究というのは、相対性原理

など数々の原理の帰結の上に立脚したものですが、普段はこのことをあまり意識していません。一方、センターのねらいは、もういちど(意識的に)原理に立ち返り、新しい現象や技術を探索し、さらに(あわよくば)新しい原理さえ発見してしまおうというものです。そこには夢があり、ワクワクさせられます。センターの成果のハイライトの一つに、ウラン化合物における新しいタイプの超伝導の発見があります。原子炉の側から見れば「ウランは核分裂さえ起こしていればいいのであって、超伝導など起こさなくてもええ」ということになるかもしれませんが、こういう「頼まれもしない」研究が、やがて新たな実用に結びつくことがあり、また原子炉などの地道な研究のレベルアップ、ひいては安全性の向上にも繋がるものと信じています。毛利元就が息子達に分国を経営させて強大な領国を築き上げたように、コアのまわりにはいくつかの半独立の研究集団があって互いに影響しあうことが重要だと考えます。これは、組織論であると同時に科学論でもあります。

3. できるできないは別としてやりたいこと

力量的に、また時間的に許されるかどうかかわからないけど、受動的に管理職をやっているのではなく、研究のすみっこでもいいから参加したいと思っています。自分が専門としてきた陽電子ビームの領域で一つのテーマをまるごと提案するかどうかは別にして、高崎研で世界に先駆けて観察に成功した反射高速陽電子回折など、応用してみると新しい世界が拓けるかもしれない手段が、陽電子にはあります。

ウラン電子系の研究の流れの中に、重い電子系のドハース・ファンアルフェン効果測定に加えて3D-ACAR(3次元陽電子消滅ガンマ線角度相関測定)を導入したら面白いのではないかなどとも考えています。人とお金が要ることなので、慎重に検討してみます。